

## 土佐浄瑠璃の脚色法（五）

——「塩谷文正物語」におけるお伽草子の浄瑠璃化——

鳥居 フミ子

はじめに

土佐浄瑠璃「塩谷文正物語」はお伽草子「文正草子」を浄瑠璃として脚色したものである。両者の本文を比較検討することを通して、土佐浄瑠璃がお伽草子をどのように浄瑠璃化したか、その脚色法を考えたい。

### 一 「塩谷文正物語」と「文正草子」

「塩谷文正物語」には次のような正本が現存している。<sup>（注1）</sup>

- 1 八行四十八丁半 小傳馬三丁目 木下甚右衛門板 扉表に「宝永五<sup>戊子</sup>初秋上旬」の刊年あり
- 2 九行三十五丁 大傳馬町三丁目 鱗形屋三左衛門板 刊年なし
- 3 絵入り十七行十六丁 刊年・板元不明

このような三種の異板が現存していることから、本曲が土佐浄瑠璃の中でも相当の人気があったことがわかる。なかでも、絵入り本が刊行されていることは、読み物としても巷間に親しまれたことを物語っている。本曲中の節事は貞享三年の刊記のある土佐節逸題段物集（木下板・鱗形屋板の二種）には収められておらず、元禄初年刊、土佐節

段物集「色竹」(大傳馬町二丁目 木下甚右衛門板)には「ふんしやうの道行」「てうとそろへ」「鳥つくし」「名香そろへ」が収められており、<sup>(注2)</sup>元祿六年刊「なよせ色竹」には「てうどつくし」が入っている。このように、本曲は元祿初年頃より土佐節を代表するものであったようである。次のような上演記録も残っている。<sup>(注3)</sup>

○元祿四年六月十日 父子四人京極甲州に振舞に行、操辰后刻ニ始。太夫土佐少掾橘正勝○塩谷文正六段○上洛義經記六段(間狂言等略) (松平大和守日記)

○元祿十三年三月一日 巳の比より御殿にいで、終日見物、がくやにてよく聞侍る也。文しやう物語とかや云上るり也。 (日乗上人日記)

○元祿十四年四月二十一日 御内證の上るり有。(略)今日は土佐上るり也。(略)上るりは玉とり二代め、文せう二返なり。 ( )

○元祿十五年一月三十日 一、御あやつり例のごとし。去冬御舞台新に大奥の御殿の前に立也。塩屋文しやう一返、次に定家のあやつり也。午前に始り戌の上に済也。 ( )

「文正草子」は中世に成立したお伽草子であったが、近世を迎えても広く読まれて愛好されたものである。無名の庶民である塩焼きが一代にして大金持ちになり、娘は都の貴族の北の方や后になるというめでたい話は、庶民のあかるい夢を托すところであったのである。「文正草子」は、柳亭種彦の「用捨箱」には、江戸時代初期、宝永頃までは、女子が正月の冊子の読初<sup>よみぞめ</sup>に用い、家々になくはない書物であったと記され、近世中期に板行された渋川板「お伽文庫」の第一に据えられている。「用捨箱」によれば、宝永元年の印本「俳諧のぼり鶴」という集に

書初に 文章の文<sup>ふみ</sup>にあやかれ姫小松 女

とあり、土佐少掾が活躍していた元祿・宝永の頃に、「文正草子」が広く読まれていたことがわかる。

土佐浄瑠璃「塩屋文正物語」は、このようなお伽草子「文正草子」の流行の中で浄瑠璃化されたのである。

お伽草子「文正草子」は、絵巻・奈良絵本・刊本などの形で、種々の異文が現存している。<sup>(注4)</sup>これらの諸本と「塩谷

文正物語」を比較してみると、「塩谷文正物語」の詞章は、寛文四年刊長尾半兵衛板「ふんしやうのさうし」に最も近い。次にその例をあげよう。

都から姫を恋い慕って下ってきた二位の中将が、商人に身をやつして姫の家に入り込み、香箱に恋歌を書きそえて贈る。その歌は、諸本一致しているのであるが、長尾板だけが異っている。「塩谷文正物語」の歌は、この長尾板の歌に一致しているのである。歌を示せば次のようである。

君ゆへにこひちにまよふみちしはのいろのふかさをいかてしらせん

(A 寛永八年絵巻「文正草子」筑波大学図書館蔵)

(B 絵巻「ふんしやう」〈仮題〉国会図書館蔵)

(C 渋川板「文正さうし」)

君ゆへにまよひきにけるみちのくのしのぶ心をあはれともとへ

(D 寛文四年刊長尾板「ふんしやうのさうし」)

君ゆへに。まよひきにけりみちのくの、しのぶ心を。あはれ共とへ。

(塩谷文正物語)

このように「塩谷文正物語」と長尾板の歌はほとんど同じで、長尾板の「きにける」が「塩谷文正物語」では「きにけり」となっている点が異っているだけである。また、国司の名前についても、A・B本は「みつしけ」となっているのに対して、D本は「みちしげ」となっていて、「塩谷文正物語」と一致している。<sup>(注5)</sup>これでも、

物語」は長尾板「ふんしやうのさうし」をもとにして浄瑠璃化していることは明白である。長尾板「ふんしやうのさうし」は、元祿初年に土佐少掾が「文正草子」を浄瑠璃化する頃、広く流布していた板であったのである。

それでは、「塩谷文正物語」はお伽草子「文正草子」をどのように浄瑠璃化したのであろうか。まず土佐浄瑠璃「塩谷文正物語」のあらすじをみることにする。

## 第一

○鹿島明神の神職大宮司卜部宿弥定光は祿徳兼備の長者であった。執事の役に、おこの者木母之介このものすけと、道を守る士、宮内三郎盛近がいた。

○木母之介は重病の女房のために鹿島明神の御山の鹿の生肝を取ろうとしてでかける。

○角岡の文太は天性の正直者で、大宮司の領内で塩を焼いて暮している。子供のないのをかなしみ、鹿島明神へ祈願に出かける。通夜をして祈ると、霊夢があつて蓮華二もとを賜わる。

○文太夫婦は帰る途中、木母之介が鹿を追い出してきたのに逢い、鹿は当社の御使者だと言って逃がしてやる。木母之介は怒って文太夫婦を殺そうとするが、宮内三郎がきて夫婦を助ける。

○程なく文太の女房は懷妊する。龍宮の干珠満珠を守る二人の龍神が現われ、塩の満干みちひを司る次第を語り、文太夫婦の行末を守ることを約して波間へ消える（景事）。

## 第二

○文太夫婦は、天の恵みもあり、夜昼働いていつしか長者となり、文正常岡と名をあらためる。娘の蓮華御前と蓮の前は十五と十四に成人し、類なき美人である上に詩歌管絃にもすぐれて評判となる。八ヶ国の諸大名は姫達に文を送るが姉妹はこれを顧みず、都の人と交りたいと祈る。

○坂東の国司あふの蔵人道重は、文正の姫君の評判を聞いて姫に恋慕し、大宮司に仲立を頼もうと思い付き、定光を招く。定光は、文正の姫は親の不興を蒙っても承諾しないから断念するようにと云って国司の頼みを断る。

○木母之介は文正を讒言したために浪々の身であったが、国司にへつらって再び世に出ようと思い、国司を訪れ、大宮司は文正の姫を自分の息子の嫁にしようという野心があつて恋路の邪魔をしているから、大宮司を夜討ちにして攻め滅ぼすようにとすすめる。国司は三百余騎で大宮司の館を攻める。

○寄せ手の大法師のために大宮司の勢は討たれるが、宮内三郎の大力によって法師を打殺し、敵を追ひ払う。

### 第三

○道重は敗北していよいよ胸をこがし、木母之介と相談して大宮司と文正の二人を滅ぼそうとし、都に上つて大宮司を讒奏する。関白としふさ公は大宮司を召し出して詮議する。定光が弁じて木母之介が裏をかくて虚言を並べた時、明神の罰があたつて木母之介は血を吐いて死に、道重は引き立てられる。

○関白の子、二位の中将年道は文正の姫を恋慕い、兵衛介吉勝・とうまの介かねながを供とし、商人に身をやつして常陸に下る（道行）。

### 第四

○睦月初めの常陸帯の神事の前夜、蓮華御前は鹿島明神に参詣し、一首の歌を書いたはなだの帯を神前にかける。

○折から参詣にきた中将が帯に記された歌をよみ上ると、神主ができて常陸帯の神事の起りを説明し、姫と中将を祝福する。

### 第五

○商人に身をやつした中将は二人の従者を連れて文正の家に行き、「てうとそろへ」「鳥つくし」「名香そろへ」を

語りながら持参の品物を説明して文正を喜ばせ、蓮華の前の望によって一兩日逗留することになる。その夜、中將はめのとの女房の手引によって蓮華御前と深く契る。

## 第六

○近衛中将年道夫婦を迎えの勅使が下る。

○大宮司は文正の姉姫が商人と契ったという噂を聞いて確かめにくる。中將の奏でる音楽を聞いて中將の素性を悟り、商人は実は近衛の中將年道であったことを一同に告げて喜び合う。

○文正一家は都に上る。文正は官祿を賜わり、中將は関白・左大臣となり、妹は女御北の政所となり、一同栄えることとなる。

「塩谷文正物語」がお伽草子「文正草子」を浄瑠璃化するに当って変更を加えた主な点は次のようである。

### 一 登場人物

#### 1 新しく登場する人物

鹿島明神の大宮司に仕える人物として宮内三郎盛近と木母之介宗次の二人を登場させている。木母之介は文正の姫に横恋慕する国司に加担して大宮司の館を攻める。大宮司方の宮内三郎は奮戦する。

#### 2 省略された人物

都における二位の中將の母（北の政所）は登場しない。従って、中將が東下りをすることを母親が嘆く場面はなくなる。

## 二 場面

### 1 戦闘場面の新設

二段めに金平風の戦闘場面が展開する。国司と木母之介が大宮司の館を攻める場面である。

### 2 鹿島明神の霊驗場面の新設

申し子のことは、「文正草子」では、文太が鹿島明神に祈って姫を授かったことは説明されている。「塩谷文正物語」では、これを演劇的な場面としている。すなわち、文太夫婦は鹿島明神に子供の授かるように祈り、その帰りに明神の使者である鹿を助ける。妻は懷妊し、龍神が現われて塩の干満を司る次第を語る。天の恵みにより、文太夫婦は塩焼きに成功する。

国司と木母之介は都へ上って大宮司と文正を讒言するが鹿島明神の罰を受ける。姫は明神のひきあわせにより二位の中將と結婚する。

### 3 常陸帯の神事の場面の新設

四段めには謡曲「常陸帯」によって常陸帯の神事がつけ加えられる。姫と二位の中將は、この神事によって結ばれることになる。

## 三 節 事

節事のきかせ所が非常に多くなっている。「文正草子」中にも節事の原因を思わせるような調子のよい箇所はあるが、「塩谷文正物語」ではそれを意図的に節事として強調し、ひきのばしている。すなわち、第三の道行、第五の景事「てうとそろへ」「鳥つくし」「名香そろへ」などの節事が設けられ、さらに第一の龍神のしかたによる語りは仕方浄瑠璃としてのきかせ所になっている。

以上のように、「文正草子」の省略・増補によって脚色された「塩谷文正物語」は、「文正草子」の致富成功談から姫の婚姻談にその主題を移すことになっているということができる。

両者の相違をさらに細かく検討して「塩谷文正物語」の脚色上の特質を考察することにした。

## 二 常陸帯の神事による脚色

「塩谷文正物語」第四は全体が常陸帯の神事による脚色になっている。「文正物語」の主人公文太は、常陸国鹿島明神の大宮司に仕え、その娘も明神に祈って賜わった申し子である。鹿島明神との関係の深い「文正草子」の浄瑠璃化にあたって、鹿島明神の有名な神事を取り入れることを思いついたのは極めて自然である。

常陸帯の神事については「奥義抄」などの古書に記されている。「奥義抄」には次のようにある。

ひたち帯のこと、あるものには、かしまの明神のまつりの日、けさうする人あまたある女は、その男の名どもをぬのゝ帯にかきあつめて、神の御前におくなり、それがなかに、あひてよかるべきをとこの名かける帯の、おのづからかへるをとりて、ねぎがとらせたるを、さもと思ふ男の名にてあれば、やがて神の御まへにて、かけおびのやうにうちかくれば、それをきゝてをとこかこちがりしたしくなりぬとかけり、  
〔『広文庫』による〕

「和歌童蒙抄」「俊頼口伝集」「倭訓栞」などには、「奥義抄」とほとんど同様に記されている。「しのゝ葉集」には、これらの諸書とはやや違って、神前に女達の名をそれぞれに書いた帯をかけ、男女が左右にわかれて座し、神主がその帯を順番に男達に渡し、夫婦の縁結びをすると記されている。「万葉集」には

東路のみちのおくなるひたち帯の

かことばかりもあはんとぞおもふ



の歌があり、藤原公朝（権僧正公朝）の歌に

衣手のひたちの神のちかひにて

人の妻をもむすぶなりけり

がある。元祿十一年刊、安藤朴翁著紀行文「常陸帯」には

東路の国の名に負ふ常陸帯

八千代をかけて祝ふ春かな

とある。常陸帯は万葉の頃から人々によく知られた神事であったのである。

「塩谷文正物語」は常陸帯の場面を、謡曲「常陸帯」に拠って脚色している。女が帯に恋歌を書いて神前に捧げ、その帯を自ら手にした男と結ばれるという趣向は謡曲の創作である。「奥義抄」などでは、女の帯を、神主が男に渡すことになっている。また、その時節を「奥義抄」では「かしま明神のまつりの日」としているのであるが、「塩谷文正物語」では「正月十日あまり」としている。これも謡曲と一致している。

「塩谷文正物語」は、このような場面の詞章を、謡曲「常陸帯」を下敷きにして手を加えるという方法によって綴っている。これは謡曲「道成寺」の詞章をほとんどそのまま挿入するという方法で採用している「定家」の脚色法と対象的である。<sup>(注6)</sup>「塩谷文正物語」と謡曲「常陸帯」の類似の箇所を示せば次のようである。

#### 謡曲「常陸帯」

○頃は正月の十日あまり。霞あきらかに日落ちて萬山

紅なり。

○あらありがたやこの神に頼を深くかけまくも。忝や

#### 「塩谷文正物語」

○比しもむ月の事なれば。よかんはげしき。夜あらしに、又おきそふる霜はしら、

○たのみをかけてひたちおび、神の。ちかいをたよりに

偽いつはりの無き御心を頼むなり。く。常陸なる鹿島かしまやい  
づく水上みなかみの。く。常世とこよの波も深緑ふかみどり。

○不思議やな手向も繁しげきその内に。わきて心も色深き。  
花田の帯のうつくしきを。御前おに掛けたる不思議さ  
よ。よりて見れば歌うたを書きたり。同じ世をかけて頼ま  
ん常陸帯の。結ぶかひある契ちぎりなりせば。心を知れば恋  
の歌なり。

○御前おに見えたる花田の帯に。書く歌占うたうらを一番に。詠えいぜ  
ん人を妹背いもせぞと。昔より神の御告おんつげなり。…恐ろしや  
疑うたがひの。神罰しんばつあたり給ふな。

「塩谷文正物語」では、謡曲「常陸帯」を完全に消化しつつして、趣向としてとり込んでいるのである。謡曲「常陸帯」の面影は消えて、文正の姫蓮華の前と中将の出あいの場合として構成されている。曲節付けからも、謡曲風を思わせるものは見当らない。前後一貫した土佐節として語られたものと考えられるのである。

このように「塩谷文正物語」は謡曲を原拠としてその原型をとどめず、完全に融合してとり込む方法をとっているのである。土佐浄瑠璃が謡曲を流用する際の一つの様相を示すものである。

て。かしまやいづくみなかみの、とこよの。なみも、  
ふかみどり、

○かけならべたる其中に。はなたにそめるひたち帯。い  
とうつくしきに何ならん。かきならしたる筆の跡。中  
将あやしみ立よりて。しやとうのひかりに見給へは。  
一首の哥にかくばかり、おなじ世を。かけてたのまん  
ひたちおび。むすぶかいあるちぎりなりせばとかゝれ  
たり。あらおもしろの心やな。むすぶかいあるちぎり  
とは。わがのぞむ。人ならばとの事ならん。あらふし  
きや。これもまた中将が。ねがひににたる恋哥こひか也。

○おびにかきたるうたらを。一ばんによむ人を。いも  
せぞとむかしより。神のさだめ給ひしを。うたがい給  
ふなたび人よ。

### 三 鹿島明神の利生譚の脚色

お伽草子「文正草子」は、もともと鹿島神社の雑式文太の致富成功談である。鹿島神社の大宮司に追放されて角折の塩焼きの許へ行った文太が、塩焼きとなって大金持ちになり、鹿島明神に祈って二人の姫を授かり、やがて姉は二位の中將の北の方、妹は后となり、自らも中納言になるというめでたづくめの話には、暗黙の中に鹿島明神の加護が了承されている。文太の焼く塩は味がよくて食べると色が白くなり、病にかからず命も長くなるという不思議な効能があったというのは、人力以上の神の加護を意味するものである。しかし、「文正草子」では神の加護を成立要件としているにもかかわらず、その靈驗を場面として扱ってはいない。二人の姫の、貴族との婚姻も、鹿島明神の申し子であることから訪れた幸運であった筈であるが、直接鹿島明神の靈驗という説明はしていない。「文正草子」は靈驗談としての性格を前面に押し出すことなく、長者譚の形でまとまっているのである。

「塩谷文正物語」では「文正草子」を淨瑠璃化するに当って、影のうすれていた靈驗談としての性格をはっきり前面に押し出したのである。鹿島明神の靈驗によって塩焼き文太は長者となり、その姫は明神の神事によって二位の中將と結ばれるのである。靈驗談として脚色することによって、各所に演劇的見せ場を設けたのである。この間の事情を、「文正草子」と対比しながら具体的にみてみよう。

「塩谷文正物語」では、文太夫婦は最初から貧しい塩焼きとして登場する。夫婦は子のないのを悲しんで、自ら思い立って鹿島明神に参籠する。靈夢をみての帰途、大宮司の執事木母之介が鹿を追いついて逢い、鹿は明神の使いだと言って、その鹿を救う。

文太夫婦が明神の使いである鹿を救ったことは、以後に展開される成功譚の伏線として重要な場面となる。「塩谷

「文正物語」では、一介の塩焼きが常識では想像もできないような出世をする原因を、この場面においているのである。この後、文太夫婦は鹿島明神の加護を受けることになる。

貧しい塩焼きの文太夫婦の所に或る日突然二人の鳥甲とりかぶとをきた客人が現われて、塩の干満について丁寧の説明し、夫婦が大福長者となることを予言して消え去る。塩焼きの秘訣を授かった文太夫婦は、神の誓いの通りに、やがて長者となり、美しい姫を持つことになる。塩の干満を語ってきかせた二人の客人は竜神の使いである。この二人の語る場面は曲節豊かな景事になっている。この景事は、「塩谷文正物語」全体の上で、節のきかせ所として脚色上の重要な要素になっているのである。節事の持つ脚色上の意味については後述することにする。

文正の姫が結婚を承知しないのをうらんだ国司は、木母之介にそそのかされて大宮司を攻めて失敗し、大宮司と文正をなき者にしようとして、都へ上って讒奏する。大宮司は召し出されて言い開きをするが、木母之介に悉く反論されて追いつめられる。その時、館が鳴動し、木母之介は血を吐いて死ぬ。これも明神の神力であった。この場面も「塩谷文正物語」が新に付加したものである。

都の公達と結ばれることを望む文正の姫蓮華の前は、大明神の常陸帯の神事によって、都から下った二位の中將と結ばれる。常陸帯の神事は、姫と二位の中將の婚姻の動機となる重要な場面として、四だんめ全体をしめている。

以上のように、「塩谷文正物語」は「文正草子」の潜在的に持っている鹿島明神の靈驗談としての要素を前面に押し出すことによって演劇的場面を脚色しているのである。それは、或る観点から言えば、「文正草子」が致富談として、人間性を前面に押し出すことによって影をひそめた靈驗談的性格の復活・強調とも解される。しかし、それは単なる中世的利生譚の世界への回帰ではない。「塩谷文正物語」にくり広げられる鹿島明神の靈驗にまつわる場面は、景事として華やかな曲節のきかせ所となっている。文太夫婦の幸運を、鹿を助けたための利生とすることによって、

致富や婚姻に対しての説明としての説得力もある。むしろ、そうすることによって、文正やその姫の出世譚としての合理性を獲得していると解すべきであろう。このような観点から、土佐浄瑠璃「塩谷文正物語」の脚色は、中世靈驗譚の近世的再生といえることができるのである。

#### 四 物事の起源・来歴を語る脚色法

「塩谷文正物語」の謡曲「常陸帯」からの脚色は、常陸帯の起源を語る場面へと展開する。

姫の奉納した帯を手にした中将が、姫の恋歌を口ずさんでいると、社人が出てきて中将と姫をひきあわせ、常陸帯の神事のいわれを語ってきかせる。それは

時に社人申さるゝは、うたがひはほんぶの事。尤さこそ有べけれ。いでさらばひたちおびの。おこりをかたり申さんと。神のむかしの。物かたり、聞につけても有がたき、

とはじまる。そして、いざなぎいざなみ二柱の神の妹背の契りより語り起し、ににぎのみことが此花さくや姫の懷妊を疑った時、さくや姫は千だんのかやをつみ、四方より火をかけて炎の中に飛び込んだが大雨が降って炎は鎮まり、火の中よりひこほほでみのみことが生まれる。鹿島明神の御神たけみかづちは、ににぎのみことに事の次第を説明し、さくや姫への疑いをはらす。この事によって鹿島明神は婚姻のなかだちの神となったのである、と説く。この語りは長々と続いて四だんめの約三分の一をしめているのである。

このような常陸帯の神事の起源についての語りは、劇の進行の上からは不要の箇所である。既に、社人はこの語りに入る前に、

おびにかきたるうたうらを。一ばんによむ人を。いもせぞとむかしより。神のさだめ給ひしを。うたがい給ふな

たび人よ。

と、常陸帯のいわれを説明し、互いに心をひかれながらも躊躇する二人に対して、

うたがひはぼんぶの事。尤さこそ有べけれ。

と言って、常陸帯のおこりを語ることになるのである。しかし、起源を語る箇所はなくても、この言葉からすぐに語り終ったあとの

かまへてうたがひ給ふまじ。それなる姫こそ御身のこふ。ぶんしやうが娘なれ。是なるはほさのしん。くわんばくでんの御ちやくし、こんゑの中將としみちぞや。

に続けば、筋は通っていて、劇の進行上の矛盾はないのである。劇の進行の上からはなくてもよいこのような場面を敢て設けたのは、「塩谷文正物語」の脚色上の意図があったものと考えられる。

浄瑠璃の中にももの起源を説明する箇所を挿入する手法は、古浄瑠璃によく見られる手法である。それは、中世の物語や、その伝統を受け継いだ「浄瑠璃姫物語」（十二段草子）に挿入されている挿話の伝統を継承するものといえるであろう。物語の展開を中断して、故事・来歴の説明にそれていくのである。「浄瑠璃姫物語」では、牛若が浄瑠璃姫を口説くのに、西行や和泉式部、志賀寺の上人の恋を例にして説明する。「浄瑠璃姫物語」では、このような本筋に関係のない挿話は次第に省略されて近世化の方向へむかっていった。一般的にいつて、浄瑠璃はその発展過程において、中世物語の持つ挿話の要素をふり落しながら、本筋を中心にして統一するという方法で近世化の歩みを辿っていったのである。しかし、この間に古浄瑠璃から挿話のすべてがなくなったのではなかった。それは、古浄瑠璃の中では、物の起源・来歴を語るというスタイルとして継承されていると考えられる。

そもく此山は、大ひたもののちをしめて、あくまをしりぞけ、わうじやうをまもり給ふ、ほくもん也、

(天狗羽討)

とてももの事に、山のゆらいをかたり給へと申ける さあらはかたり申さん、あらしんじのかた／＼や、さあらば、きう<sup>(きう牛)</sup>ばが一毛ほど申へし、それゑい山は、人王五十代くわんむ天わうの御時、

(天狗羽討)

かのもろこしの、しゆ<sup>(しゆ)</sup>はいしん<sup>(しん)</sup>な、たいふのせんし<sup>(せんし)</sup>をかうむり、にしきのひた／＼れを、ふるさとのゑいものに、かゞやかし、わ(か)てうのより吉公は、

(すがはらのしん王)

このように、「そも／＼」「それ：は」といって来歴を語るスタイル、「かのもろこしの」といって、中国の故事をひいて物事の起源を説明するスタイルは古浄瑠璃にはよく見られる形である。

日れんは聞召、やすき事と、やかて、なむめうほうれんけきやうの七じを、うみにすへ給ふ、御ふてのひつせい、なみにゆられ、はねだいもくと是をいふ、

(にちれんき)

扱上よりの御でうには、中たう宇左衛門、さう方の中に立て、あいづをさだ<sup>(ママ)</sup>あはせよとの御でう也、かしこまつて候と、たううちはをおつ取て、四本ばしらの中へ出る、是ぎやうじの、はじまり也、

(箱根山合戦)

これらは、展開されてきた劇の本筋が一段落し、その内容に「はねだいもく」や「ぎやうじ」の起源という因縁をつけ加えたのである。

物事の起源を説明することは、近世初期の啓蒙精神ともつながるものであったといえよう。庶民に語りきかせる中に庶民の知的欲求をも満たそうとしているのである。

このような来歴を語る箇所は、古浄瑠璃においては全体のバランスをくずすような長いものではない。本筋を語る枕のようにつけ加えられたり、本筋のあとに合の手のように言い及ぶ程度である。あらたまって語り出されても、「天狗羽討」の「それゑい山は」以下のように二百字程度の長さで終る。何時までもわき道にそれ続けるとい性質

のものではない。

土佐浄瑠璃になると、これが強調されて長くなる。さらに曲節がつけ加えられてきかせ所となっているのである。土佐浄瑠璃の中から拾い出してみよう。

楊弓のそのおこりを。くわしくぞんじ候也。御なぐさみのためなれば。しかたにいたさせ候はん。いかゞとはせ給ひけり。一座のめん／＼。これはよろしく候はん。はやとく／＼とのぞまるゝ。かしこまつて候と、やかて用意を。へしたりけり。扇取もち。立出て。こゑうちあげて。かたりける。そのかみげんそうくはうていは。

(吾妻業平色小町)

かげ正は有かたく。つゝしんで。てうだいなし。三どかたふけおりからの。御ことぶきを申さんと。すへひろ取てすゝみ出。はうらいかざるそのためしいぎを。たゞしく。へかたりける。さればわこくの。そのふうぎ、

(東海道兵揃)

へ時にふぢまさ。ちよくしとして。いかによしてゐる。笠木のいわやのあんない。つまびらかにそうすべし。とく／＼との御事にて。当座に。ゑふのぜうにぞなされける。よしてゐる。かしこまつて候と。まごひさしにしこうして。一／＼次第をのべにけり、そも／＼かさぎと。申は。五とくさうおう仕り。日本ぶさうのようがい也、まつ。ひんがしはこんがうせん。

(大塔の宮熊野落)

大君盃御取上、三ごん。ほさせ給ふ時。さも大いなるはご板に。数のはごの子取揃。めのわらは共持出る。是に付て御肴。あらまぼしやと宣へば。かねて心へいたりけん。あつとこたへてめのわらは。立上りつゝ其始、かたりけるこそ。へみやひなれ。あらおもしろや。あら玉の。年の始のことふきは、

(殿飾難波鑑)

其時関ぢしのゝめは。ほしにたむくることのはの。しきしたんざく笹ささのはに。むすび乍なからもたなばたの△其はじめ



りをぞ へかたりける。そも、たなばたのいにしへのみなもとふかく。たづぬるに。

(泰平篋)

しからば仰にまかせんと、かむり△かりきぬ へちやくしつゝ。さてもひいな。はじまりは。あはしまのおゝんかみ、すみよしの。明神に、なごりを。おしみ、

(対面曾我)

さて又此観世音。京都にもまれなりし。繁昌といひ境内の。名所旧跡来由を△かたりて聞せさふらへかし へ女はよきに領状して。浅草寺の浅からぬ深き。おこりを へかたりける。そもく、浅草。観世音の、ゆらいを。尋奉るに。

(浅草観音縁起)

これらの諸例をみるに、土佐浄瑠璃における物事の起源・来歴を語る箇所は、しかた浄瑠璃の脚色法をとっている。「吾妻業平色小町」には「しかたにいたさせ候はん」とある。登場人物が扇を持って座の真中に進み出て語るのである。「すへひろ取てすゝみ出」と「東海道兵揃」にあり、「扇取もち。こゑうちあげて」と「吾妻業平色小町」にある。「塩谷文正物語」は、社人が

いでさらばひたちおびの。おこりをかたり申さん。

と言って語り出すことになっている。「しかたにして」とは言っていないが、このスタイルは「吾妻業平色小町」や「東海道兵揃」と同様で、仕方浄瑠璃によって語られたものと考えられる。<sup>(注7)</sup>仕方浄瑠璃による脚色は「塩谷文正物語」第四にもある。これについては後述する。

## 五 戦闘場面の脚色

「塩谷文正物語」は第二に戦闘場面が展開される。それは、姫に恋慕する国司が求婚を断られて大宮司を攻める場面である。これは「塩谷文正物語」が新たにつけ加えた場面である。

「文正草子」では姫の評判を聞いた国司は大宮司に頼んで姫に求婚するが断られ、失望して都へ帰ることになっている。「塩谷文正物語」では、国司はあくまでも姫に執着し、木母之介にそそのかされて三百余騎で大宮司の館を攻めることになる。国司側の寄せ手の軍の中から六尺ほどの大法師が鉄棒をひっさげて現われ、大宮司方の勢をなぎ倒す。大宮司の執事宮内三郎盛近はこの法師にたちむかって戦い、法師の首を切り落す。

このように、大軍が押し寄せ、寄せ手の中から強剛な者が現われて活躍し、味方は散々なめにあって一旦は逃げるが、味方の中から剛勇の士が現われて奮戦し、かえって寄せ手の強者の首をはね、大軍を追いつかうという筋立ては、金平浄瑠璃で常用されたものである。お伽草子「文正草子」を浄瑠璃化するに当って、二段めに、金平浄瑠璃的な戦闘場面を用意したのである。

土佐浄瑠璃では二段めに戦闘場面を置く脚色法はよくとられている。土佐浄瑠璃としては比較的初期のものに常套的に用いられている脚色法である。<sup>(注8)</sup>「塩谷文正物語」は金平浄瑠璃的なものを内にかかえ込みながら、新しい脚色法を獲得しようとしているのである

## 六 節事挿入の脚色

「塩谷文正物語」には次のような節事の箇所がある。

道 行 第三

てうとそろへ 第五

鳥つくし ”

名香そろへ ”

道行は第三全体の約三分の一の量をしめ、「てうとそろへ」「鳥つくし」「名香そろへ」は第五の約二分の一の分量をしめている。分量的にも相当なウエイトを持っているのである。

これらの節事の原拠は、原典となった「文正草子」に探ることができる。「文正草子」に簡単に扱われていたものを、土佐浄瑠璃ではきかせ所として脚色したのである。

まず、道行の箇所からみることにする。

道行は、中將が商人に身をやつして、都から常陸の鹿島にむかう場面である。「文正草子」でも

ゐなか人は。あき人をこそちかげよするといふ。

とて、「女ばうのしやうぞくいろ／＼のてぐそくななどを。せんだびつに入ておひくだ」るのである。中將の一行は、道すがら歌を詠んで、つらさを慰めながら下る。しかし、道中の地名は、八橋があがっている程度で、ほとんどあげられていない。道中の地名や風景をよみ込みながら進行するという道行文の一般的な形はとっていないのである。

「塩谷文正物語」では恋しい人のことを思いながら道中の地名や風景を描写していく。「文正草子」の文章をヒントにして、浄瑠璃的な道行文を作り出したのである。節付けも豊かで、第三の曲尾となっている。華やかに演奏されたものと考えられる。

「てうとそろへ」「鳥つくし」「名香そろへ」の節事は、文正の館を訪れた二位の中將の一行中のくらまの介が語ってきかせることになっている。「文正草子」では下女に案内されて邸内に入った一行が

おなじいろのしやうぞくにいていろ／＼の物をぞうり給ふ。

とあり、

かふりそくたいうへのきぬ。むらさきのさしぬきしやくひあふぎ。もゝしきのにようばうのしやうぞくには。

といろいろな商品が並べられていくが、特に作中人物が説明する形にはなっていない。むしろ、お伽草子作者の目によって説明されている。「塩谷文正物語」では、これを登場人物による説明としたのである。

其いろ／＼をおもしろく。名のり立てうり給へ。商人たちとぞ申ける。其中にとうまの介。かねて心得有つらん。かしこまり候と。あふぎおつとりあき内ないの。色おもしろくかたりける。

このように、舞台上の人物の中から一人が進み出て、扇をとって語り出す。これは典型的な仕方浄瑠璃の形である。

「文正草子」の商人は「いろ／＼の物」を売る。まず、春夏秋冬の装束を並べあげる。次に「てぐそく」を並べる。「塩谷文正物語」では装束は省略して女性の喜びそうな小間物にしぼる。当時の社会風俗にあわせた趣向である。「てぐそく」を並べて売る箇所は、「文正草子」では次のようになっている。

① てぐそくのすぐれておぼゆるてはこすゝりかけご。るりのつぽ。とよのあかりのせちゑのくし。たゝうがみも候。こうばいくれなるぢむらさきもちぢかさねのうすやう。すみふでなども御いり候なり。② まためいかうたきものつけほしなども候。まぐらのすぐれてやさしきは。はなまぐらうけのまぐらはじめて人ににゐまぐら。かやうの物なども御入候ことにすぐれておぼゆるは。しろかねにていたる。からむまからくらからねずみ。③ うぐひすひよどりうそ。ひは。ことりなどかずをつくしたるが候めしたくや候。かゝるやさしきうりものどもかはせ給へんと。こゑ／＼におもしろくことばごとにこひの心をよせて。きゝやしるとうり給ふ。

傍線①の箇所は「塩谷文正物語」では「てうとそろへ」となり、②は「名香そろへ」、③は「鳥つくし」となる。「文正草子」では簡単に二・三の名称が挙げられたところが、「塩谷文正物語」では「〇〇そろへ」や「〇つくし」として、関係のあるものの名前を次々に数えあげ、曲節面白く語られていく。

このように「文正草子」では商人が物を並べて売るといふ趣向を、「塩谷文正物語」では節事としてのきかせ所と

して脚色したのである。

む す び

お伽草子「文正草子」は、近世初頭に庶民の間に広く親しまれた読み物であった。金平浄瑠璃衰退後の江戸の浄瑠璃界に模索を続ける土佐少掾は、この草子にめをつけ、意欲的な脚色を試みようとしたのであろう。「六段物出来合目録」の四番めにあげられるこの作品は、土佐浄瑠璃の意欲と方向性を示すものであった。

二段めに置かれた戦闘場面は、江戸の人々に喜ばれた金平浄瑠璃的な見せ場である。四段めには謡曲「常陸帯」が応用されている。五段めは「てうとそろへ」「鳥つくし」「名香そろへ」の節事が続く。鹿島明神の霊験が各所で現出する。

「文正草子」は波乱にみちた浪漫的な内容の物語ではあるが、それが平面的に説明されていくお伽草子であった。土佐浄瑠璃はこれに演劇的な見せ場を用意し、音曲的なきかせ所を設けたのである。演劇的な場の設定が行われたのである。

このような演劇的な場の設定が、「塩谷文正物語」では原典「文正草子」に密接に準拠しつつ行われているところに特色がある。これは初期土佐浄瑠璃の脚色上の特色を示すものである。

土佐少掾は極く初期の頃から、お伽草子を浄瑠璃化した「酒吞童子」を得意として、しばしば語っている。これは彼の生涯を通じての語り物であって、同じ内容のものが繰り返し語られていたのである。その内容は、お伽草子の詞章とほとんど同じで、新たな意図による脚色はなされていない。お伽草子の詞章を、曲節を工夫することによって浄瑠璃化したのである。これに対して、「塩谷文正物語」の脚色態度は、演劇的な見せ場を設けたのであって、土佐浄瑠璃にとっては劃期的な試みであったというべきである。

「塩谷文正物語」以後の土佐浄瑠璃で、お伽草子に關係のあるものに「吾妻業平色小町」「鈴鹿山大嶽丸」「頼朝遊覧揃」などの作がある。これらは、それぞれ、お伽草子「小町草子」「田村草子」「唐糸草子」に關係がある。これ等の作では、お伽草子は登場人物や構想の上でヒントを与えている程度のかかり方である。作の内容はお伽草子の世界から離れて複雑多様になっているのである。複雑多様化の脚色法は土佐浄瑠璃後期の作に顕著にみられる特色である。これについては稿を改めて考察したい。

#### 注

- (1) 拙編『土佐浄瑠璃正本集』第三解題参照。
- (2) 「大竹集（蘭曲色竹一）」では「ぶんしやうの道行」「てうどつくし」「小鳥づくし」「めいかうづくし」となる。
- (3) 『松平大和守日記』は若月保治『近世<sup>初期</sup>国劇研究』の翻刻により、「日乗上人日記」は『芸能史研究25』の紹介による。
- (4) 岡田啓助『文正草子の研究』（桜楓社）参照。
- (5) C本も「みちしげ」となっている。C本の刊年は「塩谷文正物語」よりも下がるので、土佐浄瑠璃への影響は考えられない。
- (6) 拙稿「土佐浄瑠璃の脚色法（四）——新道成寺『定家』の位相」——（東京女子大学「論集」第三十三卷二号）参照。
- (7) 拙稿「土佐浄瑠璃『名古屋山三郎』の先進性」（『国語と国文学』昭和五十六年十一月）で、土佐浄瑠璃における仕方浄瑠璃について論じている。
- (8) 注5に同じ。

（付記） 本文引用は左記の通りである。

土佐浄瑠璃……土佐浄瑠璃正本集

古浄瑠璃……古浄瑠璃正本集

金平浄瑠璃……金平浄瑠璃正本集

お伽草子「ぶんしやうのさうし」……『文正草子の研究』（岡田啓助著）所収本

謡曲「常陸帯」……『謡曲三百五十番集』（日本名著全集）